



故^{ふる}きを温^{たず}ねてみなとまち函館の未来を考える

ザ・シンポジウムみなとin函館

北海道開発局港湾空港部港湾計画課

平成21年11月10日(火)、ザ・シンポジウムみなと実行委員会主催による「ザ・シンポジウムみなとin函館」が、函館国際ホテルにおいて、約300人の参加者を得て開催されました。

函館港は江戸時代以前より商船が利用しており、1859年（安政6年）、前年に締結された日米修好通商条約に基づき、横浜、長崎とともに我が国初の国際的な貿易港として開港し、2009年（平成21年）はその開港の年からかぞえて150周年を迎えます。

函館は、港の発展とともに歩んできた街であり、現在ではその港を中心とする街並みが大きな観光資源となっています。

本シンポジウムは、開港150周年という節目を迎えるこの記念すべき年に、先人たちが築いてきた歴史や文化に触れ、函館港がマチの発展に果たしてきた役割を再認識するとともに、「観光」を軸としてにぎわいを創出し、みなとまち函館の新たな歴史をつくるため、函館港の未来図を市民の方々と一緒に考えていくもので、北海道史研究会会長の須藤隆仙氏が、函館港のにぎわいの歴史について基調講演。また、パネルディスカッションでは、西尾正範市長や、みなとまちづくり女性ネットワーク函館代表の折谷久美子氏、大間町「あおぞら組」組長の島康子氏ら5人により、函館港の新たなにぎわいの歴史づくりについて意見が交わされました。

基調講演

波瀾^{はらん}万丈、函館港^{にぎ}の賑わいの歴史

南北朝時代に書かれた諏訪大社の縁起の中にアイヌの国は渡党^{わたりとう}、唐子^{からこ}、日の本の三つあるという話が出てきます。

渡党は今の渡島半島のことで、さらにウスケシとマトオマナイという二つの小国がありました。ウ

スケシは今の函館で、マトオマナイは松前。双方の人は津軽の外が浜と往来している、と書いてあります。



須藤 隆仙 氏
北海道史研究会会長

つまり函館と松前には港がありました。

後に江差の港が加わり、蝦夷の三港と呼ばれるようになります。同じ南北朝時代の庭訓往来という書物に蝦夷の特産品として宇賀のコンブが出てきます。宇賀は旧戸井町から函館にかけての海岸を指し、そのコンブを買うために北陸の若狭から年3回、船が来たと松前藩の記録にも残っています。当時から箱館近海の高産物は大変な人気でした。

長らく江差、松前にかなわなかった箱館ですが、江戸後期に高田屋嘉兵衛が盛り上げました。嘉兵衛は蝦夷地が幕府の直轄地になると見越し、箱館と江戸を結ぶ東回りの商船航路を開きます。幕府は交易品を俵に詰めた「長崎俵物」を長崎から中国に輸出しましたが、中身の大半は箱館近海の高産物でした。箱館は長崎からも商人が来る商業港になっています。

そしてペリーが来て開港しました。今年で開港150年と言いますが、これは安政5年（1858年）の条約から数えて。実は箱館は安政元年（1854年）に下田と共に開港していました。長崎はオランダ、中国との交易が許されていましたが、フランスやロシアなどと本格的に交易する貿易港は箱館と下田が最初でした。

その後、日露戦争に勝利して北洋漁業が大変な勢いで展開され、函館はすごいまちになっていきます。複数の会社が合併して設立した日魯漁業は世界最大の水産会社と言われていました。社員の最盛期のボーナスは月給の24カ月分が支払われ、市民の間では「嫁にやるなら日魯の社員」という時代がありました。太平洋戦争に負けて北洋漁業が衰退するまで、札幌なんて比べものにならない繁栄ぶりでした。

パネルディスカッション

函館港の新たな賑わいの歴史をつくる

西尾 函館は三つの重厚長大産業のまちでした。1日10数便あった青函連絡船、下請け、孫請けで約1万人が働いた函館ドック。これに北洋漁業を加え、数万人の労働力をかかえていました。連絡船、北洋漁業がなくなり、危機の時代が来て港を考え直し、観光を重視



パネリスト
西尾 正範 氏
函館市長

するウォーターフロント開発が生まれました。物流面も見直されました。課題は、どう函館に人とモノを集約し国際的な物流ルートに乗せるのか。世界に通用する食品加工業をどう育てるのかです。函館は今年、札幌を抜きブランド調査で全国一魅力のあるまちに選ばれました。それは港があったからです。

折谷 みなとまちづくり女性ネットワーク函館が発足したきっかけは、2002年完成の港町埠頭に着岸する豪華客船をいか踊りで迎えたことです。「ようこそ函館へ」の気持ちを伝えたかったのです。岸壁で踊り始めると、遠くの船上でも見よう見まねで踊る姿が見え、みんな感動しました。港は造る人と使う人がいて初めてにぎわいが生まれます。



パネリスト
折谷 久美子 氏
みなとまちづくり女性ネットワーク函館代表



パネリスト
島 康子 氏
大間町まちおこしゲリラ
集団「あおぞら組」組長

島 折谷さんと同じ心です。函館からのフェリーに大漁旗を振り「よぐ来たのー」と叫び歓迎しています。大間では「マグロのぼり」や「超マグロ祭り」をやってきました。函館の観光客約500万人の1%でも大間に来てほしいと思います。この10年間、一生懸命にラブコールを送り続けています。大間を元気にするために函館と両思いになりたいと思っています。

須藤 素晴らしい函館港の歴史は、恵まれた立地条件で生まれました。英国の歴史学者は「歴史は地理が決定する」という名言を残しました。市民は天然の良港をもらったことを感謝しなくてははいけません。

奥平 函館港の経済効果はどうか。函館の総生産高を約2兆円とすれば、函館港は2000億円。雇用は2万人あります。ウオーターフロント開発で観光施設が港にでき、観光客や市民は海の近くまで行けます。残る課題は、文化遺産や観光施設をどう結びつけるかです。函館港は魚市場や倉庫群のそばは海沿いを歩けず寂しい。港を活用し切れていません。



コーディネーター
奥平 理 氏
函館工業高等専門学校准教授

西尾 国際的な港と空港に加え新幹線も来る。すでにハード面は1流です。これからはソフトの充実が課題となります。ホスピタリティーに磨きをかけ、市民のために港をつくるというふうを考えていい。市民が楽しみ、安らげる場所に観光客は来る。津軽海峡は月に千隻の国際船が通る。その中の少しでもいいから函館に寄ってもらいたいと頑張っています。

折谷 もてなしの心で活動したい。豪華客船が中心街から遠い港町埠頭ではなく、計画されている函館駅近くの若松埠頭に着くようになれば、乗客は歩いて西部地区まで行けるし、駅前も活気づく。ウオーターフロント地区を活性化させるためにぜひ実現してほしいと思います。

島 大間の人たちが函館に強く引かれるのは、函館の生活に入り込んで歴史や文化を一緒につくっている意識があるからです。津軽海峡を一つの文化圏、観光圏として考えてほしい。大間は函館の観光資源の一つであり、一緒に発展してほしいと思います。

須藤 現状を打開するための理念は強い郷土愛から生まれます。郷土愛をもっと培っていく必要があります。

奥平 カナダのハリファクス市の港が参考になります。ボードウォーク（木道）が大型客船の棧橋からカジノまでを結び、11万tの大型客船が着く埠頭が港の中心にあります。客船が停泊するたびに中心地がにぎわいます。函館は国際的にも知名度が高いから大型客船を呼べます。例えば、魚市場を築地のように改造し開放することで客船誘致に役立てるのはどうでしょう。築地は外国人にとって日本の観光名所になっています。港に人の流れを取り戻せば産業活性化、街中も活性化できます。

折谷 今夏の「ドリームボックス150^{*}」のような港に大勢の人が集まるイベントを毎年続けてほしいと思います。人と人が出会うことでアイデアが生まれます。

島 函館港から世界に向けた動きを見たい。いか踊りで客船を歓迎したように、世界の人たちと港で一緒に踊る。シンプルだけど伝わりやすい。世界に通じるホスピタリティーを育ててほしいと思います。

須藤 先人が築いた歴史を学んで後世に伝えることも大切です。

西尾 将来、函館は極東アジアの拠点になる可能性を秘めています。韓国や中国と交流を重ねる博多を参考に物的、人的な交流を深めていきたいと思います。

会場 港がまちをつくり、まちが港をつくることが基本にあります。おもてなしの心を大切にしながら、知恵を出し合いたいと思います。



※ ドリームボックス150
函館港「緑の島」で2009年8月8日から9日間にわたって行われた函館開港150周年記念行事のメインイベント。コンサートや市民企画のイベント、海洋スポーツ体験などの行事が繰り広げられた。